ライデンでの研究生活を振り返って

関西学院大学大学院文学研究科 受託研究員
真田原行（さなだ　もとゆき）

Profile―
2014年，東京大学大学院総合文化研究科単位取得満期退学。博士（学術）。専門は生理心理学。共著論文に The resolution stage, not the incongruity detection stage, is related to the subjective feeling of humor: An ERP study using Japanese *nazokake* puns, *Brain Research, 1778*, 147780, 2022など。

コロナ禍で約半年予定が遅れましたが，2021年10月から1年間，日本学術振興会特別研究員（PD）として，オランダのライデン大学に研究留学しました。ライデンはアムステルダムから電車で約30分の距離にあり，レンガ造りの古い街並みや運河が残った，とてもオランダらしい中規模な都市です。一方で日本との関わりも深く，かつてシーボルトが住んだ家が日本博物館になっており，またライデン大学にはおそらくヨーロッパで一番古い日本学科があります。この留学では，研究について学ぶことができたのはもちろん，異文化の中での生活を通じて多くのことを考えさせられました。また妻と幼い娘，家族総出の長期滞在ということで苦労もありましたが，家族がいたからこそ学べたこともありました。

まず研究留学先としてオランダのよいところは，ほとんどの人が英語を話せることです。オランダ人の母語はオランダ語ですが，国土が狭く他国と隣接しているため，英語が共通語として重要な役割をもちます。私は英語も流暢ではありませんが，研究にしても普段の買い物にしても，英語が使えたことはずいぶん暮らしを楽にしました。またオランダでは多くの人が夕方には仕事を終え，バケーションもしっかりとる（しかも複数回），というように余裕のある生活を大事にします。そうかといって仕事が遅いわけではなく，仕事の間は集中し極めて効率的に作業をします。私は日本にいたころ，だらだらと遅くまで職場にいることがままありましたが，彼らの生活スタイルには学ぶべきところがあるように思います。

大学生活で印象深かった事柄を少し紹介しておきます。まずは，ヨーロッパ各地から大学生・院生が集まってくることです。やはり各国が陸続きでEU圏が存在することの強みだと思います。また，主に修士課程の間に，半年程度の研究インターンシップへ行くこともよくあるようです。他大学の研究室に飛び込みその研究室の研究を半年程度体験する。これは若い学生が今後の研究の方向性を決めるうえで，視野を広げることができるとてもよい制度だと思いました。また研究環境について印象的だったのは，ライデン大学にはSOLOと呼ばれる技術者チームが存在し，教育や研究での技術的サポートを行っていることです。しかし研究者自身が技術的知識をもたないということではなく，お互いが連携しあうことで，技術的な問題を素早く解決していました。私自身もSOLOには何回もお世話になり，おかげで実験や分析をスムーズに実施することができました。また受け入れ教官であったヘンク・ファン・ステーンベルヘン（Henk van Steenbergen）博士をはじめ，同僚の方たちもとても協力的で，分析プログラムの作成などで多くの助言をいただきました。

研究留学中に参加した，フランスで開催された国際学会も非常によい経験となりました。これまでも多くの国際学会に参加したことはありましたが，他国の研究者とは面識がないので，なかなか話す機会をもてずアウェイ感がありました。しかしこの学会では，ステーンベルヘン氏が積極的に知人に私を紹介してくださったおかげで，さまざまな国の研究者と話すことができ，彼らがどのように研究に取り組んでいるのか知り，そして彼らとのつながりを感じることができました。

最後に，研究留学を考える方にささやかなアドバイスです。知らない国に行くということはそれだけで大きなハードルですが，思い切って行ってしまえば（苦労はありますが）なんとかなりますし，なによりかけがえのない経験となります。若い研究者にとって，研究留学するということは，単に業績となるというだけでなく，生活や文化や人との出会いを含めたその全体から，多くのことを経験し，考えるきっかけを与え，きっとその人生にとって多大な影響を与えるでしょう。悩んでいる方はぜひ思い切って飛び出してみてください。